サビエル生誕五百年

巡礼の道

536

藤屋侃士
（下松市幸ケ丘）

「結婚を学ぶ」ことの大切さ

～結婚を考える・最終回～

「健やかなる時も病める時も、喜びの時も悲しみの時も、富める時も貧しい時も、敬い慰め助け合い、生涯変わらぬ愛を誓います」

教会の結婚式での誓いの言葉である。私も五十二年前、徳山カトリック教会で結婚式を挙げた。あれから早や半世紀が過ぎ、誓いの言葉のように結婚生活を過ごしただろうかと考える。

このシリーズの最初に、増加する離婚、とりわけ熟年離婚が増えていることを書いた。友人がそれを読んで「離婚するエネルギーがある奴はうらやましい」と、やや自嘲気味に言った。

確かに後期高齢者と呼ばれる年齢になると、あきらめの気持ちで仕方なく結婚生活を送っている人もいるかもしれない。それでは余りにわびしく、「離婚するエネルギーもない」では自分が情けない気持ちになる。

曲がりなりにも若いころ、マリッジ・エンカウンター（M・E）という、夫婦がより幸せになる運動に関わった者としては、やせ我慢であっても、老いたなりに、いや、老いたからこそ、達することができた結婚でありたいと思う。

M・Eを山口県で始めたのは昭和五十六年（一九八一）。ぜひ山口で実施したいので力を貸してほしいと神父に言われ、日本でのM・Eの先進地、群馬や長崎に何度も出向いた。三人目の子供が幼稚園に入ったばかりの時で、上の二人は両親に預け、下の子を連れて群馬に行った。

今考えると、やはり若さとはすごいパワーだと思う。結局、十五年間、山口県内でM・E運動を実施し、参加した夫婦は百二十組、M・E実施回数は十四回であった。

しかし、尊敬していた指導司祭もガンで亡くなられ、私も会社の仕事も忙しくなり、M・Eは中止したままになってしまった。

M・E運動に限らず、高齢社会かつ少子化社会の中で、教会も修道会も高齢化して活気を失い、社会全体が低迷しているような気がする。

結婚について確信をもって言えることは、結婚する前に結婚について学ぶことの大切さである。教会でも、神前でも仏前でもよい、結婚式というセレモニーを大切にしていろいろ準備をすることよりも、はるかに重要だと思う。

私自身、事前の結婚講座などはなく、M・Eで結婚について学んだのは結婚して十五年も過ぎてからであった。このシリーズでも取りあげた「かもめのジョナサン」や「ウルマンの詩」を事例としての結婚の目標を持つことの大切さ、そのほか数々の結婚の法則とでもいうべきものを事前に学んでいたら、いらぬトラブルも少なくてすんだと思う。

ちなみに、東京のイグナチオ教会では、結婚講座は二十回、五カ月に及ぶ。商売で結婚式をするのではなく、幸せな結婚にするために、事前の結婚講座が教会での結婚式の条件なのである。結婚式場ももっとそのことに視点をあてた結婚式産業であってほしいと思う。

今、他人の力になるエネルギーはもうなくなったが、M・Eやファイアーズで学んだことを日々の生活に生かし、スパイラル（渦巻状の空間曲線）の角度はどんなに小さくとも、命ある限り、少しでも二人で上に向かって五十二年前の誓いの言葉を誠実に守りながら生きたいと思うのである。

結婚の一致（M・E）＝左＝、家族の一致（ファイアーズ）＝右＝の2つのシンボルマーク（M・Eの2本のロウソクは夫婦、中央に神＝ファイアーズは家族の一致は炎の如く）